近畿

近畿総局
和歌山県農業会議
和歌山市茶屋ノ丁2番1
和歌山県自治会館6階
073・432・6114

滋賀県支局　077・523・2439
京都府支局　075・441・3660
大阪府支局　06・6941・2701
兵庫県支局　078・391・1221
奈良県支局　0742・22・1101

## 「祭り」通じ作物の魅力伝える

### 紀の川市・台丸谷久実さん


「やりたいこと、楽しいことにはなんでも挑戦するのがモットーです」と台丸谷さん

KUMI_DAIMARU

【和歌山】「旬の黒豆のおいしさと魅力を多くの人に知ってほしいとの思いで、毎年イベントを開催しています」と話すのは、紀の川市で「ダイマル農園」を営む台丸谷久実さん（57）。枝豆の収穫体験や旬の野菜の販売などを行う「黒豆枝豆秋祭り」をこれまでに8回開催し、毎年300人を超える来場者でにぎわう。

同市出身の台丸谷さんは、2人の子どもが保育所に通うようになったことを機に就農。少量多品目を栽培するスタイルで、現在は柑橘50㌃、年間100種類以上の野菜50㌃を栽培。地元スーパーへ出荷している。

農作業が落ち着く1月から3月にかけては「腸活ランチ」を実施。倉庫を加工所兼キッチンに改装し、旬の野菜や果物、自家製調味料で作った料理を提供。台湾や香港からも利用者がある。

今年6月には3回目となる「とうもろこし祭り」を開催し、マルシェなどを実施。「今後は春夏秋冬、それぞれの季節にあわせてイベントを開き、作物の魅力を伝えたいです」と語った。

ランチやイベントの開催情報は台丸谷さんのInstagram（二次元コード参照）まで。

（田村健伍）

## 心のよりどころとなる農園に

### 河南町・岡本てるよさん


「南河内地域全体がイチゴ産地として盛り上がってほしい」と岡本さん

【大阪】河南町寛弘寺で「白ゆりファーム」を営む岡本てるよさん（54）は、約10㌃のハウスでイチゴを栽培している。

南河内地域のイチゴの産地化を図るため大阪府が運営する「いちごアカデミー」の2期生で、現在就農7年目。近隣にはアカデミー関係のイチゴ農家も多く、日々切磋琢磨しながら、地域ブランド「ちはや姫」の糖度・規格などの基準を満たす栽培技術を磨いてきた。

出荷と観光農園の両方に取り組み、紅ほっぺなど8品種の食べ比べが楽しめる。多くの人に味わってもらうため、地元直売所のほか近隣の飲食店にも出荷するなど販路を広げている。

園内は、夫が営むデイサービス事業との連携のため、区画の間隔を広く設け、車いすでも通れる設計。さらに近年は他の事業所の障がい者や働きづらさを抱える人が訪れることも増えた。「老若男女さまざまな人たちが訪れる農園づくりをめざし、地域の心のよりどころのような場にしたい」と話す。

（沼田湧悟）

## 地元特産のバラを多様な切り口でPR

### 平群町・中筋里美さん、穂奈実さん


自慢の食用バラを紹介する里美さん（左）と穂奈実さん親子

【奈良】「親子でバラ・食用バラの生産や加工品開発などさまざまな活用方法を追求しながら、地域を盛り上げたい」と話すのは、平群町の中筋里美さん（54）と娘の穂奈実さん（24）だ。

母の里美さんは、平群温室バラ組合長として、30種類のバラを栽培し、関西と関東の市場へ共同出荷している。

また、地元小学校の卒業生にバラをプレゼントするなど、子どもたちへの花育活動を積極的に行うほか、農業委員や県指導農業士会長を兼ねるなど、地域のリーダーとしても活躍している。

娘の穂奈実さんは、食用バラを加工・販売する「㈱ばらめく」を昨年立ち上げた。代表取締役として、平群温室バラ組合が生産した食用バラをエディブルフラワーとして商品開発するほか、ローズティーなどへの加工品開発も手掛けている。

「これからも見る・香る・味わうといったいろいろな側面でPR活動を行い、五感で楽しむバラの魅力を全国へ発信していきたい」と中筋さん親子は将来を見据える。

（木村将史）

---

# 輝く女性農業者　近畿地方各地で活躍　地域に活気を！！

農林業センサスによれば、農業就業人口に占める女性の割合は約４割に達した。近年、生産現場から経営、地域づくりまで、農業のさまざまな分野で女性農業者の活躍が広がっている。今回は、近畿府県で輝く女性農業者を紹介する。

## 「自分らしくご機嫌に」イチゴ育てる

### 甲賀市・金谷絵里さん


クラシック音楽を聞かせて育てたごきげんイチゴと金谷さん

【滋賀】「地域とのつながりなど、目に見えないものの価値を大切に農業に取り組んでいる」と語るのは、甲賀市で「ストロベリーセクター」を経営する金谷絵里さん。

家庭菜園に親しみ、いつか農業に向き合いたいと考えていたという。子育てがひと段落したのを機に、子どもが好きなイチゴでの就農を決意した。

現在は、章姫、紅ほっぺ、よつぼしなどを約10㌃で栽培。減農薬を心掛け、UV－B（紫外線）照射や防虫テープを病害虫の防除に活用している。

イチゴにとって最適な環境づくりを心掛け、金谷さん自身も「楽しみながらご機嫌な気持ちで育てる」ことで丁寧な作業につながっている。

また、地元の保育園の園児や、老人ホームの利用者の収穫体験を受け入れるなど、地域の人々との交流も大切にしている。

「今後はオフシーズンにも一年を通してイチゴを楽しめるよう、加工品を並べ、マルシェで提供したい」と笑顔で話した。

（福井かれん）

## 若者が魅力感じる環境に

### 加西市・竹内百合子さん


農業委員会事務局で竹内さん

【兵庫】加西市の竹内百合子さん（57）は、夫の幹博さん（57）とともに、水稲・黒大豆・野菜など約20㌶で農業を営む㈱ノウデンを経営している。

同社は土づくりから出荷まで一貫して取り組む。自社農園で生じた稲わらなどを地域の畜産農家に提供し、牛ふん堆肥を自社農園に還元する「耕畜連携」や、就労支援施設と連携して季節ごとの農作業の機会を提供する「農福連携」も実施している。

また、市内にある農業大学校の学生を実習生として受け入れるなど、社長である夫とともに、若手の育成と地域への貢献にも取り組む。自社で受け入れた実習生が、引き続き農家バイトとして残ってくれるなど、うれしい手応えも感じている。

竹内さんは同市農業委員会の会長職務代理者、JAや土地改良区の理事も務める。

若者の地元離れや農家の高齢化が進む中、竹内さんは「耕作放棄地の発生防止や農村景観の維持などで、若者が地域に魅力を感じる環境をつくり、地域を元気にしたい」と語った。

（山口昭彦）

## 地域とともにある農業法人を次代に

### 京都市・梶谷よしみさん



京都ファームの経営理念を掲げた看板の前で

【京都】梶谷よしみさん（46）は、京都市右京区京北地域で水稲や赤シソなど23㌶を栽培する㈲京都ファームの代表者。

梶谷さんは、大学卒業後、大手商社や山梨県の農業法人を経て、15年前に家族が経営する京都ファームに勤務。同時期に農業の企画・コンサルティング会社も自ら設立し、日本各地でパワフルに活躍してきた。

梶谷さんの転機となったのは、京都ファームの代表を務めていた兄が8年前に急逝したこと。京北地域での活動が中心となった梶谷さんが最も大切にしているのは「地域農業の維持と継承を通じ、次代に『農』をつなぐ」。兄と一緒に作った経営理念だ。

中山間支払や多面的支払の地域組織の世話役を務め、農産物検査員や農業経営アドバイザーでもある梶谷さんには、いつも地域の農業者からの声かけが絶えない。

「地域全体で農業をつなぐのが私の使命。同世代の仲間も増えてきたのがうれしい」と語っている。

（●●●●）